

言葉と銭金

粕谷 隆夫
かすや たかお

マッチ、祖国という日常語が豹変します。
マッチ擦るつかのま海に霧ふかし
身捨つるほどの祖国はありや

(寺山修司)

父よあなたこそ起たねばならぬ

(道浦母都子)

「え、この娘っ子、ムシヨに入っていたの」

「親父さんのほうが正しいよ」

「親父にはよく叩かれたよ。でも自分の娘は叩けないなあ」

ヘルメット学生諸君との真逆の反応。

人の世の豊かさに驚き、角打ち（筑豊などの炭住の酒屋での立飲み）で一杯の気分です。

軽いパンチが心地よい感じです。
更に真逆の反応に驚くことがあります。
若いとき、菅原文太のトラック野郎に夢中になり、もちろんトラックのメカと運転が好きでわっぱ回しになった運送会社の同僚たちは、つぎの歌にこう答えました。
釈放されて帰りしわれの頬を打つ

昔から言葉の魅力には考えさせられて

きました。というより、言葉がなければ考えるという行為ができない事は不思議な生理ではないですか。高校時代、美術室で絵を描いている先輩に、「絵を描こうとする時、言葉がまず浮かびますか?」と問うと、「馬鹿なことを言うな。言葉は邪魔だ。君の目が黄色を見た処をぼくが見ると、おそらく十二色の黄色を見るのだ。ピカソの目玉に負けないぞ」自惚れを若いときに充分しておきなさい、歳を経るとそれもできなくなると言ったのは、たしか志賀直哉でしたか。

西洋の横文字から、知識／概念／命題／科学などの言葉を発明した西周は、深い漢学の知識（あ、使ってしまいました）

と熱い情熱で、見事な翻訳語を次々に世に送り出しました。いくじなしの旗本ばかりでなく、優秀な幕臣も多くなりましたね。言葉で引つかかる事のひとつに、この翻訳という行為もあります。いま地球上のさまざまな言語に対し、その言葉が、日本語すなわち国語に訳されています。辞書の誕生、いろいろな方々の地道な汗の賜です。しかし言葉の意味は訳されても、音は訳せません。言葉の音楽性も考えると奥が深いです。我が祖国の言葉は母音が多いですね。ある外国語で、「星ってなんて言うの」「ズベズダ」わたくしは「アバズレ・阿婆擦れ」を連想しました。あの星は美しい。あのズベズダは美しい。あのアバズレは美しい。もうマッチ擦って燃やしたいです。

僕は歩いていた
風のなかを

と言つても、安全で甘い塀の中をです。学校と刑務所は娑婆ではありません。【言葉】の周囲をグルグル回っているうちに、口に糊する時期が来てしまいました。学生時代は本と酒だったが、世の中に出る

とは、それが本代と酒代になるのかな、こんな意識しかありませんでした。三〇歳前後までに一人前の社会人となる漠然とした予感ですかね。「一家を成す」という語調は気恥ずかしいが、どうも金銭を真面目に料理しておかないとひどい目に会いそうな気がしてきました。要するに【金】に対する鑑を身につけなくてはと考えてくれた作品社『日本の名随筆』五〇巻を紐解こう、特に、田村隆一編『酒』は良かったです。死／夢／恋／顔／母／山・・・な、な、な、何と、『金』のテーマ編がありません。まさか、そんな馬鹿な、書物に傍線を引いて何とかここまで、この処までうまく乗り越えてきた習性が瓦解しそうです。我が祖国の文人は金に関する名随筆を残さなかったのか。そういえば貧乏／病氣／女が、言葉を奏でる作家の三大要素でしたか。

今は亡き親父が、アラン『幸福論』を読んでいるわたくしに「君はフランスのモリストを武器にするのか。四二歳の厄年を過ぎたらその人たちの言っている事が良く分るよ」と大笑いしていました

が、すなわち親父がわたくしの生活の防波堤だったのでした。「思うにならぬ世の中に一人ひとりが生まれ、思うままにない人生を黙って耐えて生きるのです」「君にすすむ一杯の酒、西の方陽関をいずれば故人なからんさ、それとも政宗の馬上少年過ぐかね」親父は五三歳の若さで鬼籍入りしたが、どうも死んでしまった人の方が生きている人よりも形がはつきりしています。

こちらの胸倉をつかんだ男が、「貴様、銭金の問題じゃないだろう」という時は、一〇〇％銭金の問題なのです。また「この世はすべて金です」と腹に力をこめてこちらに唾を飛ばしながら喋っていたサラリーマンの瞳をのぞき込むと、すでに確信を持ってずうろたえているのです。このように熱くなっている人達を笑わせてなだめるのは、他人に関してはこれも言葉なのです。立てば借金、座れば家賃、歩く姿は質屋へおつかい、おつかい、とね。お金の『本物』は持てないけれど、お金の『本』は持てますぜ。いつかお金に困らなくなったら、銀座でベコ飼いましょ

うよ。でも一晩寝て、酔いもさめると、なにも解決していないことに気づくのです。

みぞれ降る

石狩の野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

「四九八九千円、約五百万、今月末資金ショートです」

「えッ、ほんとう、ピエー」

運転資金ショート、ここで【言葉】は死ぬのです。というよりわたくしの頭と心から消失するのです。金策、金策、金策、金を減ぼしたのは遠じゃなくて元だったか。ようやく一段落して、めどが付いた状態は、百メートル自由形を全力で泳ぎ切ってプールから這い上がった姿、肩で息をしていますが。ここに周りからさまざま意見の雹のつぶてが落ちてくる。耳が死んでいるのに。

「馬鹿野郎、錢金を舐めるんじゃないねえ」

「もつと経営を勉強しませんとね。いい人紹介しますよ」

「零細企業の最後の最後には首吊りがあります。生命保険たつぷりと聞きましたよ」

ハア、ハア、御もつとも、御もつとも、

ハア、ハア。

啄木の詩などは何処かへ吹っ飛んでいきます。

でもわたくし個人だけかもしれません。が、錢金の勉強、勉強と念仏を唱えているのはしばらくの間だけでそれが持続しない、喉元過ぎれば女性は忘れないが、錢金は忘れる。そうするとトルストイ【言葉】が復活するのです。これは奇妙な事ではないですか。「あなたが表現しているのは思想ではありません。空想です」「空想で、もちろんかまいませんが、空想を表現できるのも言葉の力だというのは不思議だし、言葉が無ければ会話が成立しないことは立ち止まって考える必要がありますよ。言葉が自分自身を裸で表現してしまうという事実、これは金よりも空想ろしいと思いませんか。心眼の強い他人からみればわたくしの語調でわたくしを一発判断されます」錢金とは、困らないときは、おのずから消失し、日々の生活には言葉による判断と行動が生き生きと復活するのです。

しかし錢金が一切を決定する場面が登場したときは、わたくしの生活時間の生

殺与奪権は錢金が握っていて、言葉は頭がいいのか消え去ってしまいます。生活が一変して、気持ち硬直してしまいます。思考停止すなわち言葉の喪失。言葉の死。この【言葉と錢金】のリフレイン、岸辺の寄せては返す波は、ジギルとハイドの生活感覚です。なんで錢金の息の根を止めることができないのでしょうか。なんで錢金に対する盾と矛を万全にして、言葉の宇宙の探求に時間をすべて捧げる生活を確立できないのか。

田一枚植えて立ち去る柳かな

娘踊れば稲穂も踊る

そういえばあの自然な労働感覚のよこびはどこに行ってしまったのか。頭が過熱して、どうも迷路に入り込んでしまったのでしようか。このころ、佐野厄除け大師、わたくしは四二歳の厄年を過ぎました。一九九四年。この前後数年間にあれが来たのです。バブル崩壊の大津波です。この大津波の認識と感覚は、正直言って当時はピンときていませんでした。入江の寄せては返す波の音と、それに運ばれてきた蟹と砂浜で戯れていたわたくしは、金と資本に関する哲学と実践を、自

信をもって進めていた千石船の知人たち（名刺交換だけの人もいました）が、海の藻屑となる姿を見たのでした。場末の酒場で生き残った小物たちが会話する姿、みなさん肩で息をしている感じです。某国立大学経済学部出身の某大手商社六社のひとつ

に在籍の男は、「君は文学と歴史に傾斜し過ぎています。経済／経営、うん金融論をもっと勉強したまえ。（科学と数学／確率を忘れていないか）」とわたくしはいつも意見されてきました。その彼が「ちえ、いつもいつも金の増殖ばかり考えていたからだよ」と吐き捨てたときは、な、な、な、何と、これこそ真逆の反応でした。びっくり、疲れました。

水源池の水面は静かでした。

ゆく夏や恋も白雲水源池

いまは西岡公園となり、多くの人が散策しております。四〇年前には、朝夕、下宿から散歩で来ても、静寂の自然だけで、そこには誰もいません。太古の気韻につつまれて茫然、ここにたたずみ四季の移ろいに身を任せていると、こんな世界がほんとうに有ることに畏怖を感じ、また訝しく思い

ました。東京から札幌へ到着すると、まず水源池を散策してから、いまは逝去されました恩師のK先生宅（漱石ころのK先生とは別人です）で一献、必ずご馳走になります。

「先生、小生五十路を過ぎて、わたくし自身の素材がはつきりしました。わたくしの精神はつくづく鼓腹撃壤です」「鼓腹撃壤か。なかなか君子にはなれないからね。でも鼓腹撃壤が許されているのも、君の周囲が、職人の軍団に守られているからですよ。あたりまえに健全さを日々保つのは意外とむずかしい。お金と付き合うこともむずかしいが、言葉は恐ろしいよ。自分に甘く、他人に厳しい落とし穴にはまるのは、言葉が媒介すると思う。職人は使う道具を大切に、それを片時も離さず磨く、というよりそれを強制される。健全のもです。それにしても、酒の功德は、酒さえあれば銭金はいらないうという事かもしれない。この歳になると二合で極楽だよ。そうそう明恵上人をどう考えるかね」

ジェントルマンで、ゼテムブリーニとは違った意味合いの人文主義者の先生が、

この日は托鉢の禪坊主に見えました。

クリスマスが終わり、清潔な粉雪が舞う日、大学の図書室も今日で閉館、静謐の時間が流れています。ふるさとが瀬柵の、かわいくて美しい（これは並立が許されるのか、矛盾するのではないか？）図書館司書のSさんから、「いつ東京に帰省するのですか、汽車のキップは買ったのですか」と聞かれ、センチメンタルになりました。しかし若年時に、この図書室で立ち読みした以下の文章は、現在もここに刻印されたままです。

『作家は、観照の世界といふ全く不自然な心的態度のうちに棲むものだ。この世界に居ると、實生活は、狂態で充滿してゐると見えるのが当り前な事なのである。この言はば視覚の或は知覚の危機を経験してゐないやうな者は作家ではない。彼はひたすら言葉の工夫によつて、この危機を切り抜ける。（中略）實世間を参照しなければ言葉は死ぬであらうが、一方、實世間の在るがまゝの姿などといふものは、箸にも棒にもかゝらぬものだと知つて置く方がよい。』
（小林秀雄・井伏君の「貸間あり」）